愛知工業大学研究報告
第３２号Ａ　平成９年

『非難のコーラス』の中の『ベガーズ・オペラ』

The Beggar's Opera in Alan Ayckbourn's *A Chorus Of Disapproval*

磯　部　哲　也
Tetsuya ISOBE

Alan Ayckbourn's *A Chorus of Disapproval*, first produced in 1984, depicts a four-month rehearsal of Pendon Amateur Light Opera Society for John Gay's *The Beggar's Opera*. The play uses seven scenes and thirteen airs from *The Beggar's Opera*. This article examines the relationship between the plot of the play and the scenes and airs of the opera. Guy Jones, welcomed into the Opera Society, is cast as Crooked-Finger'd Jack. As he is soon promoted through the cast and finally to the main role Macheath, he gets involved with corruption because Guy Jones is actually a guy who doesn't say no to anything. The characters of the play express their feelings through the airs. What they perform on stage overlaps with their private life, and what happens in their private life leads to a rehearsal for the stage.

I

アラン・エイクボーン作『非難のコーラス』は１９８４年5月２日にスカーバラのスティーブン・ジョゼフ劇場で作者自身の演出で初演され，８５年８月１日にロンドンのナショナル・シアターで上演された。

『非難のコーラス』はイギリスの地方都市にあるペンドン・アマチュア・ライト・オペラ団体による２月から５月にかけての４ヶ月間のジョン・ゲイ作『ベガーズ・オペラ』のリハーサル風景を描いている。『西洋演劇用語辞典』によると，ライトオペラ（軽歌劇）は次のように定義されている。

> 喜歌劇。しばしばグランド・オペラの荘重なスタイルを戯画化する。その登場人物と主題は下層階級を反映している。ウィリアム・ギルバート卿とアーサー・サリヴァン卿は，サヴォイ劇場で演じられた有名な「サヴォイ・オペラ」で，このジャンルの人気を高めるのに大いに貢献した。[1]

イギリスにおけるアマチュア・ライト・オペラ団体とは，オペラ愛好家によって原語ではなく英語で，そして本格的なグランド・オペラ作品ではなく，せりふなどが入ったオペレッタ作品を上演する素人の団体のことを指している。『非難のコーラス』の中にアマチュア・ライト・オペラ団体によって上演される作品がいくつか言及されている。まず第一に，『メリー・ウィドー』[2]や『学生王子』(33)などのヨーロッパのオペレッタ作品がある。こ

れらの作品は当然英語に翻訳された台本が使用されて上演される。次にブロードウェイ・ミュージカル作品が頻繁に上演されている。『オクラホマ』(14)，『王様と私』(14)，『サウンド・オブ・ミュージック』(23)，『回転木馬』(27)などの作曲家リチャード・ロジャースと作詞家オスカー・ハマースタイン２世によるミュージカル作品はもとより，１９１６年作の『チュー・チン・チャウ』(33)から『ウエスト・サイド・ストーリー』(14)そして現代のミュージカル作品に至るまでレパートリーに入っている。

さらに，『白雪姫』(85)や『シンデレラ』などのクリスマス時期に上演される子供のためのパントマイム劇がある。

上の定義に示されているように，イギリスでは作詞家ギルバートと作曲家サリバンによって１９世紀に作られた『ミカド』，『ペンザンスの海賊』などの「サヴォイ・オペラ」と呼ばれるオペレッタ作品は人気が高く，「サヴォイ・オペラ」を専門に上演するアマチュア・オペラ団体が各地に存在している。『非難のコーラス』の中には「サヴォイ・オペラ」の作品名は言及されていないが，ナショナル・シアター公演のパンフレットには，ペンドン・アマチュア・ライト・オペラ団体の過去の上演記録として，１９８０年の『ペンザンスの海賊』の公演写真が掲載されている。[3]

そして，１７２８年に初演されたジョン・ゲイ作『ベガーズ・オペラ』は，アマチュア・ライト・オペラ団体の重要なレパートリーになっている。１８世紀のロンドンにおいてオペラといえばイタリア・オペラが正統であった。ロンドンの劇場でもオペラはイタリア語で上演されていた。それに対してゲイは当時民衆の間で流行していたバラッドに新たな歌詞をつけ，物語の中に入れたバラッド・オペラの基礎を築いた。

『ベガーズ・オペラ』が現代においてもなお魅力があることを『非難のコーラス』の中の登場人物である演出家ダフィッドは次のように述べている。

> 私はこの芝居が ── 初演はいつだったかな，１７２８年だ── 当時と同じように今でも楽しく，活気があり，関連していることを絶対に確信している。・・・スーキー・ドーリー・・・ドリー・トラル・・・ヴィクスン夫人・・・彼女たちは町の娼婦たちだ・・・名前を聞くだけでほとんど顔が見えるようだ。ポリー・ピーチャム。それだけで彼女について知る必要なことすべてがわかる。何とすばらしい時代じゃないかね。何とすばらしい時代だ。ともかく，おれたちの時代と比べれば。(33-34)

『ベガーズ・オペラ』は１７２８年に初演された作品であり，その風刺は当時の政治や社会に向けられたものであるけれども，その根本的な風刺は現代にも当てはまるものである。

『非難のコーラス』のリハーサル風景の中で，『ベガーズ・オペラ』から７場面と１３曲のアリアが引用されている。本稿では，これらの場面やアリアが『非難のコーラス』の筋とどのような関連があるかを考察していく。

Ⅱ

『非難のコーラス』は，『ベガーズ・オペラ』の最終場面を上演しているところから始まる。カーテンコールで，主人公のマックヒース役のガイ・ジョーンズが観客から拍手喝采を受けるが，カーテンが降りると，彼は他の出演者から全く無視される。ただハンナ一人がガイの着がえの服を持ってきて，何か話しをしたい様子ではあるが，すぐに別れを言って出ていく。本来なら，みんなで初日を祝うはずであるが，全員の気持ちがばらばらになり，冷たい雰囲気が終演後の舞台をおおっている。何故このような状況が生まれたのだろうか。筋は五ヶ月前にさかのぼり，ガイが初めてオペラ団体を訪れた時点に移っていくのである。

ガイはウェールズ人の演出家ダフィッドの

オーディションを受けに来る。ガイは一年前に妻に死に別れて落ち込んでいたが，立ち直るきっかけとしてオペラ団体に加わろうとしたのであった。ダフィッドは３０代後半でオペラ団体の原動力ともなっている精力的な人物である。オーディションではガイはダフィッドの迫力に押され，彼の質問に短い返事をするのが精一杯である。ガイが気づかないうちに他の出演者たちが，彼の周りに集まってくる。ガイが歌い終えるとダフィッドは彼の歌を喝采し，他の出演者たちもこれに加わる。五ヶ月後の彼等の態度とは全く対照的にガイはここではあたたく迎えられている。

場面は舞台監督であり，またジェニー・ダイバーの役を演じるブリジットの父親が経営するパブへと移っていく。パブは混んでいて，団員のほとんどが来ている。ガイはダフィッドに連れられてきて，団員と話しをする機会を持つことになる。

ガイをスコットランド人と間違えているジャーヴィスはガイにスコッチのおかわりを勧めにくる。ガイはジントニックを飲んでいるので断わるが，ジャーヴィスはおかまいなしにブリジットに注文する。ここでエイムスのピアノの伴奏に合わせてテッドが『ベガーズ・オペラ』第二幕一場のアリア第１９番を歌い，団員たちが唱和するようになる。『ベガーズ・オペラ』において，マックヒースの手下であるミントのマットが追いはぎに出かける前に歌い，盗賊たちによって合唱される歌である。

その同じ歌を団員たちがパブで歌っている。「さあ，なみなみとグラスを満たせ」(25)と歌っている間に，ジャーヴィスがガイのグラスの中にスコッチを注いでいくのである。

この歌は一つの事件を引き起こすきっかけとなる。このパブは音楽やダンスの免許を受けていないのでブリジットはすぐに歌をやめるよう注意するが，これがかえって酔っ払った客たちを刺激することになる。その中の一人クリスピンはなおもブリジットに挑発的にピアノを弾き続ける。舞台監督として舞台装置を一人で設営したこともあるブリジットは腕力に自信があり，クリスピンに攻撃を加えていく。クリスピンはブリジットをわずかにかわしながらもだんだんと出口のほうへ不名誉な撤退を強いられていくのである。

この様子を見ていたダフィッドは，主役のマックヒース役であるクリスピンがけがをするのではないかと心配する。しかし，ダフィッドはクリスピンがマックヒース役を演じることについては満足していないのである。

> 彼はおそらく主役のもっとも理想的な選択ではなかった。とにかく，気質的には合っていない。本物の選択ではなかった。(28)

劇の初めで，観客は『ベガーズ・オペラ』の上演をすでに見ていることから，観客はガイが最終的にはマックヒース役を演じることを知っている。クリスピンがリハーサルの初めの段階でマックヒース役を演じていることは観客に違和感を生じさせる。しかし，ダフィッドはクリスピンを最良の選択ではないと判断していることから，後にクリスピンが主役から降りてガイが抜てきされるであろうと観客は推測するのである。

ガイはオーディションで自分の音域を「軽いバリトン」(13)であると言っている。オペラでは，王子様や恋人役などの主役は普通テノールの役である。『ベガーズ・オペラ』のマックヒースのような追いはぎであり，また女性の誘惑者である役は，テノールでは声が軽すぎるので，モーツァルトの『ドン・ジョバンニ』の主人公同様，バリトンかバスの役である。それ故，ガイの音域はマックヒース役に適しているのである。

ガイがどの役を演じるかという問題が最初から団員の間で話題となっている。アマチュア劇団では，固定した団員と流動的な団員とがはっきりと分かれている。主要な役は固定した団員によって年功序列的に振り当てられていくのである。リハーサルの初期の段階では，公演に参加できるすべてのメンバーが確定していないので，配役のいくつかは未定のままリハーサルが行われる。ガイのようにリ

ハーサルの途中で参加する人は，その都度役が決められるのである。

ダフィッドはガイの役を決める仕事を自分の家で行うことにする。団員の一人レベッカはガイにミントのマットの役を与えるようダフィッドに言う。しかし，ダフィッドはガイに鉤指のジャックの役を振り当てたのである。ミントのマットは『ベガーズ・オペラ』において，マックヒースの第一の手下であり，四場面に登場し，合計１７のせりふと２曲の歌が与えられている。特に第二幕三場はマックヒースとミントのマットだけが登場する場面である。それに対して，鉤指のジャックは同じくマックヒースの手下でありながら，登場する場面は第二幕一場だけで，与えられているせりふは一つのみである。ミントのマットと鉤指のジャックとでは，役の大きさがかなり違っている。配役を決める大きな要素は団員の経験，すなわち団員になってからの年数である。ダフィッドはガイにミントのマット役を振り当てることについて，次のように言っている。

> その登場人物［ミントのマット］の可能性はあったが，演出家としての私の気持ちは，ミントのマットは初めての君にとって少し冒険過ぎるように思える。(33)

結局，ダフィッドはこの役を経験豊かなパッカー医師に振り当てることを決めたのである。

ガイが多国籍企業であるＢＬＭに勤めていることを知り，ダフィッドは弁護士として興味を持つことになる。ダフィッドは目下，ＢＬＭに隣接している以前クリケット場であった空地を購入することに関心がある依頼人の代理を勤めているのである。ＢＬＭがまもなく敷地を広げるといううわさがこの空地の価値を突然引き上げたのである。ダフィッドはこのうわさの真偽をガイに尋ねるが，ガイは何も聞いてなく，全く知らないのである。

この場面が終わった後，舞台は『ベガーズ・オペラ』第一幕九場のアリア第１１番のリハーサルに変わる。ピーチャム役のテッドが次のように歌う。

> 狐はさらう，おれの牝鶏
> 娼婦は盗む，健康と小銭
> 娘は手を突っ込む，おれの金箱
> 女房は奪う，おれの休息
> 泥棒はかすめる，おれの品物
> だけどいずれもこそ泥にすぎぬ
> 用心すべきは裁判沙汰よ
> ひとたび弁護士に依頼すれば
> すっからかんが世の定め　(42)

『ベガーズ・オペラ』において，ピーチャムは表向きは盗品回収業を営んでいる。実際は，その盗品も手下たちに盗ませたものであり，確実に持ち主に品物を探し出して渡すことができるのである。このように違法行為を合法的に行うことで，ピーチャムは社会的信用と利益を得ているのである。ピーチャムは弁護士の仕事も自分の仕事と同じであると考えている。第一幕一場でピーチャムは次のように語る。

> 弁護士が堅気の商売だというんなら，このおれさまもご同様さ。奴もおれも一人二役を演じるんだ。つまり悪党どもを告発もするし，弁護もする。おれたちが悪党を庇護し励ましてやるのも当然さね，なにしろあいつらのおかげで飯が食えるんだから。[4]

そして『非難のコーラス』において，ダフィッド自身がピーチャムによって一番の悪党だとされている弁護士であり，アリア第１番で歌われいる財産(estate)である土地(estate)の取り引きに目下関わっているのである。

パッカー医師は新しい病院の勤務当番を全面的に再編成しなければならないので，ミントのマットを降りるという連絡がダフィッドに入る。重要な役に穴があいて困っているダフィッドにハンナはガイを推薦する。ガイは最初に振り当てられた鉤指のジャック役をリハーサルで一度も演じたことはないが，一つ

のせりふをいろいろな方法で演じ，団員に助言を求めるなどして，熱心に取り組み，役をほぼ完成させたところであった。

ハンナは自分のとった行為が思いがけずうまく行き，衝動的にガイにキスをする。そしてそれは二人が初めに意図しなかったほどの真剣なキスへと発展していった。場面転換直後の『ベガーズ・オペラ』第一幕八場のリハーサルでアリア第９番が歌われる。ポリーの母親ピーチャム夫人が娘に「ああポリー，キスは戯れにするものよ，男の心をつなぐには邪険にするのが一番さ」(51-52)と歌い，娘のマックヒースに対する燃え上がるような恋心を戒めている。そして歌の２番で，ポリーはお母様だって同じことをしたはずよと歌って母親に返している。

『非難のコーラス』において，ハンナの家庭は父親中心に動いている。父親のダフィッドがいない時は，娘たちは父親の人形と一緒にお茶，散歩，夕食の時間を過ごしている。子供たちは父親に甘え過ぎていて，ハンナは家庭の中で孤独感を感じていた。そんなときにガイが現われたのである。ガイの紳士的な態度や思いやりのある言葉に魔法にかけられたように魅了されたのである。ポリー役のハンナが将来のマックヒース役のガイに真剣なキスをしたことに対して『ベガーズ・オペラ』のアリア第９番を通して，ハンナを戒めているのである。

ここでダフィッドとハンナとガイとの関係は『ベガーズ・オペラ』におけるピーチャムとポリーとマックヒースとの関係に重なる。ピーチャムが知らないうちにポリーをマックヒースが誘惑したように，ダフィッドがリンダの両親からの電話に出るために席をはなれていた間に，ハンナはガイに引きつけられていったのである。しかし，マックヒースはポリーを意図的に誘惑したのに対して，ガイには誘惑する意思は全くなく，反対にハンナから誘惑されるのである。

次にガイに近づいてきたのはイアンであった。イアンはガイにガールフレンドと一緒に家に遊びに来よう招待する。イアンとフェイ夫妻はスワッピングを趣味としているのである。イアンにはそれだけでなくもう一つの目的があった。イアンはＢＬＭが今の敷地を広げるうわさを聞き，値上がり確実な隣接する土地を購入することを企んでいたのである。そのためイアンはダフィッドと同様このうわさが真実かどうか確かめたかったのである。ダフィッド夫妻もイアン夫妻もガイに対する関心は同じである。夫たちは土地で利益を得るための情報をガイから聞き出そうとし，妻たちはガイとの性的交渉を求めようとしているのである。異なる点はダフィッドはハンナの欲望を知らないのに対して，イアンはガイからの情報に対するお礼として妻の欲望を利用していることである。イアンはさらにフィンチ役を降り，ガイにその役を譲るのである。『ベガーズ・オペラ』において，フィンチはピーチャムの手先で四場面に登場し，１３のせりふと１曲の歌が与えられている。ガイは入団してわずか一ヶ月で三つ目の役が振り当てられたのである。

ガイはフェイと関係をもった帰り道で，『ベガーズ・オペラ』第二幕二場のミントのマットのアリア第２０番を歌う。この歌はマックヒースとその一味が追いはぎに出かける時に歌われるものである。この元歌はヘンデルの１７１０年作の歌劇『リナルド』で使われたマーチである。このマーチに合わせて追いはぎ集団が稼ぎに出かけていき，ガイはフェイの体を征服した喜びを歌うのである。ガイは私生活において，ミントのマット役を完成させたのである。

路上で歌う場面はそのままリハーサル風景に転換していく。アリア第２２番の後の踊りの場面で，演出家のダフィッドは女優たちにマックヒースの方を見るよう指示する。すると，エニッド一人を除く四人がマックヒース役のクリスピンの方ではなく，間違ってガイの方を見てしまうのである。ガイは第一幕の終りまでには，役の上ではなく，私生活においてマックヒースと同一視されているのである。

Ⅲ

第二幕の幕開けのカフェの場面でガイとハンナは緊迫した雰囲気の中にいる。ハンナはガイに自分とフェイのどちらを選ぶのか決心するように迫っているのである。そこにフェイが現われて，二人のテーブルに同席する。フェイはガイが忘れていった下着を入れた袋を彼に渡そうとしたことから，三人がこの袋を引っぱり合うことになる。この場面は『ベガーズ・オペラ』第二幕十三場でのニューゲイト監獄の場面の変奏である。娼婦たちに裏切られて，逮捕されたマックヒースはニューゲイト監獄に収監された。監獄の看守の娘であるルーシーともまたマックヒースは結婚しているのである。最近マックヒースの妻になったばかりのポリーが夫の面会に監獄を訪れ，ルーシーと鉢合わせになる。二人はマックヒースの牢屋の前で，それぞれ自分が正当な妻であることを主張する。マックヒースは知らぬふりをして，何とかこの状況を切り抜けようとするだけである。

ガイもまた二人をそれぞれ違う風に愛しているので，どちらかに決めるということはできないのである。ハンナは最早夫からかえりみられることはなく，それだけガイに真剣になっている。それに対して，フェイのガイとの交際は計略的である。フェイが彼に忘れ物を届けに来たのも，土地についての新しい情報を聞き出すための口実にすぎないのである。ガイはフェイから土地の所有者は同じ団員のジャーヴィスであることを聞いて驚くのである。

ガイ：彼が持ち主だとは知らなかった。
フェイ：そんなことは重要ではないの。要点はあなたが頼んできたことじゃないの。なぜなら，それは私たちの契約の一部だったからでしょ。
ガイ：契約だって。どういう意味なの。
フェイ：つまり，イアンがあなたのために役を降りたでしょ。フィルチ役を。
ガイ：フィルチ役をだって。そうしてくれとは頼まなかった。
フェイ：そうね。しかし，あなたはノーとは言わなかった。実際，あなたはどんなことに対してもノーとは言わなかった。(66)

ガイの「どんなことに対してもノーと言えない」性格によって，彼はまわりの人間にとって都合のよい男となっている。夫にかえりみられることのないハンナにとっては愛人であり，フェイにとってはスワッピングの相手であり，ダフィッドとイアンにとってはちょっとした情報を与えてくれる産業スパイとなっている。さらに，演出家としてのダフィッドにとっては常に穴のあいた役を埋めてくれる何でも屋である。

この場面のすぐ後にアリア第２７番が歌われる。これは『ベガーズ・オペラ』第二幕九場で，収監されたマックヒースに対して，ルーシーが歌うアリアである。「罠にかかったねずみ」(66)は文字通り牢屋の中にいるマックヒースを指している。そして『非難のコーラス』においては，「罠にかかったねずみ」はガイのことを表わしている。

『ベガーズ・オペラ』第二幕十三場は，ニューゲイトに収監されたマックヒースをめぐり，ポリーとルーシーが激しく争う場面である。二人のヒロインの争いは『ベガーズ・オペラ』が書かれた１８世紀のイギリス・オペラ界を風刺したものである。１７２７年６月に仲の悪かった二人のイタリア人歌手，ファウスティーナ・ボルドーニとフランチェスカ・クッツォーニは，ロンドンの舞台上で殴り合いや髪の引っぱり合いなどのけんかを始めた。この事件はイタリア・オペラに関心のない人にさえ話題となった。[5] ゲイは『ベガーズ・オペラ』序幕において「役柄については，花形女優のお二人にたいして細かなところまで配慮してあるから，どちらからも文句の出る気遣いはないね」[6] と上演前年に起きたこの事件のことに言及している。そして，第二幕十三場で劇化したのである。

『非難のコーラス』でエイクボーンは，

『ベガーズ・オペラ』第二幕十三場のリハーサルでこの事件を再現している。ポリー役のハンナとルーシー役のリンダは，それぞれマックヒースに裏切られた妻として嘆き悲しんでいる。役の上でなく，二人は私生活においてもマックヒースに裏切られているのである。リンダはマックヒース役のクリスピンに，ハンナは潜在的なマックヒースであるガイに裏切られている。それ故，二人が語るせりふは二重の意味を持つことになる。アリア第３６番で二人が「私は騙された」(70)と歌う時，役の上としてはマックヒースに向かって歌っているが，私生活のレベルではリンダはクリスピンに，そしてハンナはガイに向って歌っているのである。さらに，『ベガーズ・オペラ』においてポリーのせりふに付いている「傍白」[7]というト書きは，『非難のコーラス』では「明らかにガイに向けて」(68)というト書きに変えられている。

リンダはせりふ覚えが悪く，少し間があくと，舞台監督であるブリジットが最初は一文字ずつ，次には早口で教え，最後には彼女からクリスピンを奪った優越感からくすくす笑いを始めるのである。このブリジットの態度に耐え切れなくなったリンダは，ブリジットの髪をつかみ，床に投げつけ，二人の取っ組み合いが始まる。二人のけんかはこの劇の中ではハンナとフェイとの役の上での争いの変奏であり，『ベガーズ・オペラ』におけるポリーとルーシーとの争いの現代版であり，さらに１８世紀のロンドンのオペラ界におけるボルドーニとクッツォーニとのけんかを舞台上で再現したものである。

ダフィッドとガイとハンナは何とかして二人を分けるが，その間「この争いの根本的な原因」(69)であるクリスピンは二人の争いをおもしろそうに眺めアリア第３５番を歌うのである。

どちらか一方だけとなら
おれも仲良く暮らせるものを
二人して亭主を責め立てる
こうなりゃおれは黙るだけ
チントンシャン　(71)

さらに，クリスピンはダフィッドにこの騒ぎの責任を問われた時，ダフィッドの下腹部を膝げりし，外に出ていってしまう。

主役のマックヒースに穴があいて困っているダフィッドに，今度ガイを推薦したのはレベッカであった。レベッカにもまたガイに関して企みがあった。レベッカの夫ジャーヴィスはＢＬＭの隣の空地の所有者である。ジャーヴィスはガイからＢＬＭが敷地拡張のため土地を買うかもしれないという情報を提供されていた。レベッカはその情報の見返りとして，ガイをマックヒース役に推薦したのである。ガイはほとんどフィルチ役を完成させた後，三たび何かの見返りとして役を得たのである。

リハーサルでガイはマックヒース役として初めて『ベガーズ・オペラ』第三幕十一場のアリア第５３番を歌う。この歌は再び監獄に収監され処刑間近であるマックヒースがポリーとルーシーのうちどちらを正式な妻とするか決められない気持ちを描いている。このアリアはまたガイの気持ちを表わすものである。ガイはハンナとフェイの二人の人妻との交際をどちらにも断わることができずに，ずるずると今だに交際を続けているのである。

ガイはマックヒース役を得た後に，その追いはぎ役に見合うようにお金も手に入れるのである。匿名で５００ポンド入った封筒がガイのところに送られてきたのである。ガイはジャーヴィスから送られてきたものだと思い，レベッカに尋ねてみるが，彼女は明確な答えは避けて，ただそのまま受け取って，楽しみなさいと言うだけである。ガイはまたしてもお金に対してノーと言うことができず，そのままポケットに入れてしまうのである。ガイは私生活において，お金を手に入れることによりマックヒース役を経験していくのである。

テクニカル・リハーサルの間にガイはハンナに別れ話しをする時，リハーサルでハンナがアリア第１７番を歌うことで彼女の気持ちが伝えられる。

別れることのこの辛さ
どうしてあなたから離れられよう
本当に辛いこの別離
どうしてポリーが別れられよう　(88)

マックヒース役に登りつめたガイについに破綻が訪れる。ガイが勤めるＢＬＭが閉鎖されたのである。これにより団員がガイに託していたすべての希望が失われたのである。このため，ガイは舞台上にいるハンナ，イアン，フェイ，ジャーヴィスそしてレベッカのすべての役者に無視されるのである。そして観客がすでに劇の幕開けの場面で見た『ベガーズ・オペラ』第三幕十五場が演じられて，幕が降りる。

Ⅳ

『非難のコーラス』の中で『ベガーズ・オペラ』から７つの場面と１３曲のアリアが劇の筋の展開に合わせて使われてきた。それぞれの登場人物の心境はアリアを通して適確に表現されている。そしてリハーサルで使われた場面は，私生活における登場人物の状況と重なるものである。舞台上で演じられることと同様のことが私生活においても起こり，また私生活の出来事が『ベガーズ・オペラ』を演じるためのリハーサルとなっているのである。

ガイはどんなことにもノーといえない性格のために本人が気がつかないうちに団員の私生活に深く関わっていき，「ガイは自分の受動性のために他の登場人物たちの期待や欲望を写す鏡になっている」[8]。彼自身鉤指のジャック，ミントのマット，フィルチそしてマックヒースと役が変わっていくにつれて，私生活においてだんだんと性的快楽や金銭を得るようになっていくのである。

ガイは他の登場人物の欲望や期待に応じて，いかようにも変わりうる何でもない男(guy)である。ガイという名前にはもう一つの意味が隠されている。ハンナの子供たちは父親が家にいない時は，自分たちで作った父親の人形と一緒に過ごしていた。

双子の子供たちでさえ［私たちの関係を］不審に思っているの。父親の人形をガイと呼び始めているの。運よく，ダフィッドは子供たちはかがり火の夜の準備を早くから始めていると思っているだけなのよ。(62)

１１月５日はガイ・フォークス・デイである。この日は元々は１６０５年１１月５日に国会議事堂の爆破とジェームズ１世の殺害を企て，未遂に終わった事件の日である。現在では，この日が近づくとイギリスの子供たちはその事件の首謀者であるガイ・フォークスの等身大の人形をぼろ切れなどで作り，町内を引き回して，夜にかがり火で焼き捨てるのがガイ・フォークス・デイの風習である。ハンナがガイと関係を持っていたのは４月頃であるので，ガイ・フォークス・デイには半年近くも早い時期である。それにもかかわらず，ダフィッドが全く不思議に思わなかったのは，ガイ・フォークス・デイの風習が一般的であることとダフィッドがあまり家庭のことを気に留めていないからである。

ガイとガイ・フォークス・デイとの連想はガイのその後の運命を暗示するものである。ガイ人形がかがり火に焼き捨てられてしまうのと同様に，ガイも『ベガーズ・オペラ』の公演が終われば，他の団員から捨てられる運命にあるのである。

注

1．テリー・ホジソン著，『西洋演劇用語辞典』鈴木龍一・真正節子・森美栄・佐藤雅子訳　(研究社出版, 1996年)　１４５．
2．Alan Ayckbourn. *A Chorus of Disapproval* (London: Faber and Faber, 1986) 14.
3．イギリス・ナショナル・シアター公演パンフレット　*A Chorus of Disapproval: New Play by Alan Ayckbourn* (London: The National Theatre, 1985) 14.

このパンフレットによると，１９８２年クリスマスに『シンデレラ』，８３年に『オリバー！』，８４年に『サウンド・オブ・ミュージック』を上演している。ペンドン・アマチュア・ライト・オペラ団体はもちろん架空のオペラ団体である。

4．John Gay, *The Beggar's Opera*, ed. Edgar V. Roberts, Regents Restoration Drama Ser. (London: Edward Arnold, 1969) 6-7.
訳文については，海保眞夫訳『乞食オペラ』(法政大学出版局, 1993年)を参照した。

5．David Nokes, *John Gay: A Profession of Friendship* (Oxford: Oxford UP, 1995) 409-12.参照。

6．John Gay, 5-6.

7．John Gay, 54.

8．Richard Hornby, "Ayckbourn's Men." *Alan Ayckbourn: A Casebook*, ed. Bernard F. Dukore (New York: Garland Publishing, 1991) 111.

（受理　平成９年３月21日）